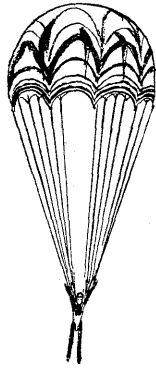


近代短歌に現われた子ども（二十三）



大塚 雅彦

(43) 未亡人の歌

未亡人という語はもと中国の故事に出で、つまり『左伝莊公二十八年』にもとづく熟語で、夫に死におくれた身ということを下したのに始まるが、その後、「そういう境遇の女性を他から呼ぶ一般的な呼称」になつたらしい。私はあまり好きな語ではないが、他に適当な用語もない（寡婦、後家ごけなどの語もあまり芳しくない）ので、世間では何となく使われているのであろう。

ところでわが国ではどの位の数の未亡人が居るのであろうか？ 官庁や関係団体などの白書や統計資料を見ないと正確なことはわからないが、後述の『この果てに君ある如く——全国未亡人の短歌・手記』を見ると、「あとがき」に「わが国

の未亡人の総数は、厚生省の推定によれば約百八十万といわれている」とあり、またこの本の短歌の選者をした窪田空穂は序文の冒頭で「現在未亡人と呼ばれる人が二百万近くもあり、その三割の六十万は戦争未亡人だと聞き、言い難い感がする」と述べている。今次大戦は多くの未亡人をつくった。不幸にも戦争によって最愛の夫を奪われた彼女たちは、亡夫の忘れがたみである子どもを抱えなどして、どのような生活をその後続けたのであるうか、それを思うと私はまことに「言い難い感がする」のである。いま、その未亡人たちによって歌われた子どもを瞥見しよう。

(イ) 森岡貞香 『白蛾』

森岡貞香^{さきか}は大正八年松江市生まれ。昭和九年「ポトナム」短歌会に入り小泉菱三に師事、翌年山脇高女卒業。十九才で結婚したが夫は間もなく出征する。昭和二十一年夫は中国より復員したが、四月夫は急逝、若い未亡人となった。二十四年「女人短歌」創刊に参加。その後、三十二年「ポトナム」退会。同人誌「灰皿」「律」等を経

て、四十三年、歌誌「石畳^{いしだま}」を創刊して今日に至った。歌集は『白蛾』(昭28)、『未知』(昭31)、『聲』(昭39)、『珊瑚数珠』(昭52)等がある。

『白蛾』は彼女の第一歌集で、短歌雑誌連盟賞、世評高き一巻であった。夫との間に遺された一児(男)をかかえ、「病弱の子持ちの寡婦」と自ら詠んだように病身である自己をきびしく見据えながら、荒い時代の中で成長してゆく愛児に熱いまなざしを注ぎ、情感や官能をも潜ませつつ、鋭く生の不安や心の蕩揺を詠出している。

① 拍^はみがたきわが少年の愛のしぐさ頤^{あご}に手触^{たふ}り来^くその父のごと

② あまえよる子をふりほどきあひし眼のぬるめる黒眼よつと捕はれぬ

③ 月に照り枯生のやうな古畳さみしき母と坐らぬか子よ

④ 月のひかりとなりし畳に子を招^よべば肢影ながく曳き少年は来ぬ

⑤ つくづくと小動物なり子のいやがる耳のうしろなど

洗ひてやれば

⑥ 蠟の灯にまろく照らさるる少年いましふくよかなれば
生きたしわれは

いずれも歌集『白蛾』より抄いた。作者の歌はみずみずしい情趣に溢れ、ゆたかな感性から発する繊麗な描写や、鋭角的感覚的な把握にすぐれ、豊潤な才質をばげしくぶつけるような甘美な作品を造型する点に特色がある。いわゆる未亡人の歌ということから想像されがちな自己限定的なものではない。①の「頤に手触り来」、②の「ぬるめる黒眼」、③の「枯生のやうな古畳」、④の「肢影ながく曳き」、⑥の「蠟の灯にまろく照らさるる」等、いずれも生々しい感覚的表現であり、魅力的である。⑤に述べているように自分の胎をいためた男児を生き生きとした小動物のように見ており、古風な母情といったものから解放されて新鮮な母子像を呈示し、それでいて、この愛児を通じて亡夫のしぐさをオーバードラップさせており、しかも③のようにやや古典的な静謐さも湛えている。従来未亡人とその子ども、といった発想を超えた

ユニークな作風ではあるまいか。

(四) 『この果てに君ある如く』

雑誌「婦人公論」は昭和二十四年秋から全国の未亡人に呼びかけ、彼女たちの生活の現実に取材した短歌と手記を募集した。集まった作品は短歌が五九二人の約四二〇〇首、手記は三七三人の約三九〇篇に及んだが、それらを各四名ずつの選者を依頼して選んでもらい（短歌の選者は空穂・茂吉・迢空・善磨）、優秀作品は翌二十五年一月号から三月号に至る誌上に発表した。そして、その掲載された作品全部を作者別にまとめて二十五年五月単行本として中央公論社から刊行した（五十三年八月「中公文庫」にも入れられている）。それが『この果てに君ある如く』である。前述の如く「全国未亡人の短歌・手記」というサブ・タイトルがある。企画者がいわゆる「戦争未亡人」だけを対象にしたものとは思えないし、応募者も「戦争未亡人」に限られたわけではなく、一般の未亡人も含まれているようである。しかし終戦数年後という時点で募集されたことを考慮すると、かなり多く

の今度の戦争によって夫を喪った未亡人が応募者の中に含まれていたと思われるし、そうでなくても敗戦直後の生活の経済的、精神的苦しみを人一倍負っていたと思われる未亡人たちの体験や思念が色濃く詠出されていると見てよいであろう。ただ、一般応募作品であるから、森岡貞香作品のように文学的、質の高さを見出すことは困難といわざるを得ない。短歌を若干抄出してみよう。

①うとましき夢よさむれば吾兒わがこねむる吾兒わがこと浄きよらに生なきざらめやも (愛甲葉子)

②吾子にすらうとまるる日は家のこと皆なげうちて死なむと思ふ (井倉信子)

③さびしげに父の写真を見つめゐる吾子に悔起る折檻かたのあと (石田シゲ子)

④汝なれのために無我夢中なる母われの祈りも知らずこの稚わかさよ (岩崎英子)

⑤誇らかに吾が母ぞとぞ友に告ぐる吾子よ嬉しもこの母をすら (潮井ゆふ)

⑥一心に虫を追ひゐる子が姿母のむほんは許さざるべ

し (大島妙子)

⑦わが膝にのぼりて下りず末の子はひと日われ待ち耐へたりしかも (倉橋とし枝)

⑧昂たかぶりても言ふ吾子に真向ひてひそかに思ふかくありし夫つまよ (佐藤松子)

⑨ぞうするの腹すく早しとあはれわれ子等に早寝のくせをつけたり (鈴木秀子)

⑩父なくて生なひゆく吾子と思ひつつ髪を切りやる項うなじのいとしさ (藤沢典子)

⑪戦死せし夫がかたみの子のあれどわがもてあますころのもだえ (堀井みち枝)

⑫家族おほき家の起きふしおのづから子を叱ることの多きをかなしむ (宗広マサ子)

⑬吾子が名を呼ばはり給ふ御声さへ聞ゆる如し夫生あれし家 (村松泰世)

いずれも歌意明白なので多くの説明は要るまい。子にすらうとまれて時に自死をおもふ人、子を折檻しすぎて悔む人、自分を“母”と友に子が誇らかに告げ居るのを

喜ぶ人、時に燃ゆる女としての心のほめきや情炎を子のために鎮めようと堪える人、子のもの言いやしぐさ、が亡夫そつくりなのに胸を突かれる人、子に食物を充分に食べさせてやれないのを歎く人、多人数家族の中での生活でつ子を叱るのが多いのを悲しむ人等々——実にさまざまである。借問す、これらの未亡人諸姉、今なお健在なりや。而して、この母たちにより育てられし幼児ら、心直く且つ慧敏に人と為りしや否や。

(44) 原爆の歌

たひらぎの祈りの中に広島のかなしみの
日をまた思ひいづ 山本康夫

かの日わがいのちを生きし記憶さへまざ

まざと暗し八月六日 古川春子

毎年八月六日になると私は広島あの原爆の日を思い出す。あれから三十九年、歳月ははるけく過ぎた。広島は惨禍の跡も見つけ難いほど復興し、人々は平和と繁栄をたのしんでいるかに見える。しかしあの魔の遺産はあまりに大きく、医学的にも未解明な放射線後障害に今も

苦しむ人々が居り、高齢化しつつある被爆者の苦しみや不安は大きい。昨年七月二十八日の朝日新聞の記事によれば、被爆者を対象にしたアンケートでは、彼等の八割が「原爆によって身体が悪くなった」と回答し、九割が将来の健康、暮らし、老後などに不安を訴えているという。また原爆で肉親を失った人たちの悲しみや歎きは未来永劫尽きることはあるまい。

巡り来し八月六日汝が欲りしものみな今

はありて切なし 越智紋子

大人はもちろん、多くの子ども達が一瞬にして生きながら殺され、あるいは身体がただれて日に日に死んでいった。こんにち物資が溢れ、人々が生活を楽しむ日が訪れても、無辜のこの子ども達を蘇らせて生きる喜びを味わわせてやるすべもない。

早く昭和二十六年十月、広島少年少女たちの手記を集めて世におくつた名著『原爆の子——広島少年少女のうつつたえ』という本がある。広島の小・中・高校、大学等の児童、生徒、学生たちが、原爆投下の惨状やこの

地獄を見た驚きやかなしみを綴っており、編者の長田新博士が序文で述べているように「世界中の誰も体験しなかった人類史上最大の悲劇と惨禍とを、身をもって体験した広島少年少女たち」が「全世界に訴える」思いを刻印しているかのようである。しかし私は今、それから三年後の昭和二十九年八月、「歌集広島編集委員会」の手によって編さんされた歌集『広島』をとりあげてみよう。これは当時「広島にあるすべての歌の団体が手をつないで」協力し、多くの広島市民たちから募集した原爆短歌作品を集録したものである。尨大な数の歌の中から、特に子ども達がこの原爆によってどのような惨苦を蒙ったかを指摘してみたい。

①窓べりに八月六日の陽を浴びて子をあやしむし

休日なりにしに

(井上清幹)

こんな何気ない日であった。無気味に飛行機が飛んでいたが、人々はさして気にもとめなかったという。悲劇は一瞬に來た。

②教へ児ら畑耕せるたまゆらに閃光過ぎて地鳴り

とどろく

(齋藤哲子)

閃光と共にこの世の地獄図絵は訪れた。

③火ぶくれになりて裸に倒れある処女水欲る吾が

足つかみて

(内田英三)

④焼けただれ盲となりし幼子が母の名呼びて

さ迷ひをれり

(大沢張夫)

⑤死体浮くプールの水を食り飲む女子学生のやき

腫れし唇

(川手亮二)

⑥おしの子が盲の親の手をひきて逃げまどひきぬ

火の海の中

(小阪茂子)

⑦こと切れし母とも知らずその乳をまさぐるよ

この盲ひたる児は

(河野淑子)

⑧ポロのごと火傷の皮膚は垂れ下りなす術もなく

さまよふ少年

(佐々木克巳)

⑨母ちやんと絶叫しつつ少年がはだしで炎の中を

走れり

(竹下和孝)

⑩我が母と思ひて乳を吸ひつくしねむりぬ頬に

穴のあきし子

(辻榎良江)

① 重傷の一団の中の透るこゑいまだ幼し母と

よぶこゑ

(中川雅雄)

② 原爆にてプラットホームより飛ばされし弟は

少し馬鹿になりたり

(新田隆義)

③ 風呂敷を引き裂きひきさき括れども吾児の血汐は

噴きやまなくに

(長谷川精作)

④ 虚空つかみ熱いよ熱いよと少女のこゑ呪ひの

ごとく日蔭なき街

(深川宗俊)

⑤ 生き乍ら身体焼かれて帰り来し子をほめやるも

いまはのきはに

(山本紀代子)

身体を焼かれ、ただれ血を噴き、水や乳を欲り、親を求め、絶叫する子ども達。そして次の如く累々たる死体。

母子共にこと切れ、師弟共に黒焦げになった童達。

⑥ 親呼びて叫びたらむか口開けしまま黒焦げし

幼児の顔

(中邑浄人)

⑦ 子を抱き坐りしままの姿勢にて黒こげとなりし

母も居たりき

(白鳥きよ)

⑧ 帰り来し妻は答へず泣き伏して抱ける小箱を

われに差出す

(益田礼助)

⑨ 子がむくろ手押車に結びつけわれと妻とが

こもごもに押す

(山本康夫)

⑩ あふ向きに死にし童女よしづかなる双のまなこを

見開きゐたり

(横山 靖)

⑪ 大き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの

骨あつまれり

(正田篠枝)

次のような作もある。非情のようだが、この親の気持も切羽つまったものなのだ。

⑫ 水筒の水乞はるるを恐れゆく瀕死の吾子に

残さむとして

(山本康夫)

ケロイドの顔を笑う次のような児も居るが、子どももさまざまだ。

⑬ 町ゆけば我が顔を見てあざ笑ふ心なき子らに

涙わきいづ

(尾形静子)

⑭ 火の街ゆ赤子助けて来し少女炒り米噛みて

含ましめ居り

(加納節壽)

⑮ のようにうつくしい人情を發揮する少女もあるの

だ。こういう修羅場で出産する母親も次のように居て、人間の生命の神秘は不思議なものだ。

②爆撃をうけし刹那の衝撃に月の足らざる子が
生れたり
(中原仁市)

③空襲の合図と共に生れ出し吾子板の上にその
ままにあり
(平野美貴子)

子を死なしめた親の慟哭と断腸のおもいは

④焼死せし児が写真の前にトマト置き食べよ
食べよと母泣きぐどく
(正田篠枝)

⑤勝つまでとお粥代食たべさせて死せし我が子の
霊にあやまる
(福田栄代)

と続き、それは次の如き悲痛な思いに極まっている。

⑥吾子のごと原爆にあひて死にたしと思ふ日ありて
恐るものなし
(山本紀代子)

日を経ても敷きは深まるばかりである。

⑦一望の焼野が原を子を索めさまよひし日の
敷かひ去らず
(上野夕穂)

⑧誰彼の死したる噂子とせしがその子もいまや

死にてしまへり
(高橋武夫)

⑨しみじみと湧くさみしさよ爆死児の小さき
位牌に灯をともしつつ
(松村松風)

⑩あれちのぎくしげり生ふ日の魂まつり吾子の名
よびてうづくまりぬ
(新田みどり)

⑪汝れに似しゆきずりの娘の臨終にし水あたへし
がいたく鮮し
(同)

万斛のうらみは、まことに世々を経ても尽きず、魂祭に流す精霊舟に乗せられて幽魂はいずこを指して行くのであろうか？ 私はこうして書き記して来た歌々を、幾たびも読むに堪えない思いがする。私は戦後幾たびか広島を訪うた。そのたびに公園に行き、あの不戦の誓いの碑の前に立ち死者の鎮魂を祈念し、次いで、千羽鶴に蔽われた峠三吉のあの「人間を返せ——」という有名な詩碑にぬかづいた。そして、三吉と一緒に、親を返せ子を返せきょうだいを返せ友だちを返せ人間を返せ、と叫びたい疼きのような衝動に駆られて佇立していたのであった。
(お茶の水女子大学)